

昭和の南海地震体験談

氏名:神原 平男(かんばら ひらお) 「本人の希望により掲載していません。」
生年月日:昭和4年
地震を体験した場所:古座川町
当時の家族状況:祖父、父、母、兄、弟、妹三人

1) 地震発生時の状況

当時 17 歳、戦後当時、自宅は半農半漁(網元)の生活をしていて、現金収入が無かったので、古座川には、親類の網元があり、紀伊大島で、“いか”や“サンマ”が良く獲れたので、古座川で漁をして生活していた。

船の船頭が、その朝早く、空をみて、「今日の空おかしいから、船を出さんとこ」といって、地震発生朝 4 時は古座の港にある、親類の家の 2 階で、白浜から一緒に行っていた 8 人と、漁を取りやめて、寝ていた所、地震遭遇。

ズボンを履くのも難儀する揺れで、慌てて表に出て、船を太いロープで電柱に結わえ、自分も電柱に掴まるのが、精一杯だった。

2) 津波襲来時の状況

古座の港の水が一旦引いて、津波が来たが、川口一杯で止まった。揺れが収まってから、翌日 22 日、「白浜全滅」の知らせを受けて、船を出して、白浜に向けて出発した。あちこち見たがいつも通る近道(海の)が通れない状態になっていた。

途中、船のロットが折れて漂流。田辺のサンマ漁船に助けられて、曳航してもらい、白浜・田辺を見たが、とても船が着けられない状態だったので、すさみに戻ってもらい、船をアンカーいれて停泊し、田辺のサンマ漁船で田辺に行き、そこで粥を頂いてから、22 日に、白浜に戻った。

3) 家族の行動・被害

留守中、家族は、家の前の小山に逃げて無事

4) 集落・周囲の被害

戻って見ると、家は壁が落ちていた、鴨居まで床上浸水 2m。

米も庭に流れ、一緒に船底に塗るコールトールが混ざって食べられなくなっていた。

近所も大体同じ。近所では 14 人死亡。



5) 津波後の生活

22 日に戻ってから、船で、不明者捜索、何体も遺体を上げた。

上げるたび医者に検死をしてもらった、そして、身元不明の人は、仮埋葬した。親類も死んでいた。電気・水道が止まって、水道の復旧に携わった。

7~8 年やって、独立して本業となった。

6) 次の災害への備え

昭和 42 年に、東白浜土地区画整備事業で、低い土地全体を嵩上げした。

自分の避難場所は決めている。6m 越える津波が来るであろうと予想されている。



<現在の霊泉橋: 中央部、橋の横に水色の管、沿っているのが水道管>

当時、架かっていた橋が崩落、橋の横に一緒に並んで架かっていた水道管も崩落したので、12 月 30 日まで復旧しなかった。